

令和元年台風19号被害における現場緊急対応について

1. 想定を超える被害の発生

令和元年台風19号（10月12日未明から13日未明にかけて東京都を通過）により、南西建管内では総雨量600mm（恩方雨量計）を超える記録的な豪雨を観測し、日野橋の橋脚沈下をはじめ、道路や河川に甚大な被害をもたらした。私が所属していた八王子西工区は管内の西半分が山間部である。代替路のない道路での土砂流出による道路閉塞や、河川沿いの道路護岸が崩落してしまうなど、数多くの場所が被災し、複数の路線で通行止めを余儀なくされた（図-1）。浅川、南浅川にそれぞれ並行する陣馬街道、旧甲州街道において、特に被害が多発した。

被害発生当時、工区では、私と工区長の2名で水防対応に当たっていたが、12日の正午過ぎから同時多発的に被害が発生し、通常時の対応では処理しきれない状況に遭遇した。

工区の担当職員として、想定を超えた被害発生から応急措置までの初動対応や事務所との連携など、臨機応変に対応した経験を報告する。



図-1 被害箇所図・通行止め路線

2. 突き付けられた課題

災害が発生した際は、フロー（図-2）に従い、被害拡大や二次災害防止のため、速やかに初動対応を行うことが重要となる。

しかし、同時多発的に被害が発生したことで、フローに沿った対応ができる状況ではなくなり、多くの課題が突き付けられた。

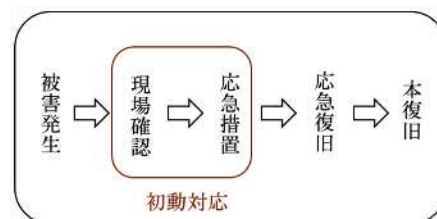


図-2 災害対応フロー

2.1 難航した現場確認

被害状況の確認のため現場に急行しなければならないが、被害箇所が多く、現場確認が追い付かなくなってしまった。住民や他機関からの工区への通報で情報過多に陥り、整理が追い付かず、どこから現場確認に着手すれば良いのか判断できない状況となった。また、職員も少なく、限られた対応にならざるを得なかった。

2.2 緊急を要する応急対応

今回の災害は、河川沿いの道路護岸の崩落や沢からの土砂流出による道路閉塞など、二次災害を防止するための緊急の措置が必要となる被害が多発した。通常は工区から単業者者に対応を指示するが、その方法では対処しきれない状況ではなく、手をこまねく状態となってしまった。

2.3 多岐にわたる調整

道路護岸が崩落した現場では、通信企業者の人孔が露出し倒壊してしまう恐れがある（写真-1）など、ライフラ

インへの甚大な影響が懸念された。また、通行止めによる路線バスの運休や道路利用者への広報など、多岐に渡る調整も必要となった。

3. 厳しい状況の中での臨機応変な対応

多発した被害の対応を余儀なくされたことから、工区と事務所が一体となり、以下の方法で対応に当たった。

3. 1 事務所との連携

工区は現場確認を最優先することとし、現場で得られた情報をレスナビ等で逐次送信して事務所と共有、今後想定され

る応急復旧の内容を事務所へ報告した。事務所では情報を集約し、全容の把握、通行止め等の周知を行った。現場到着後、危険箇所にはセーフティーコーン等で可能な限り安全措置を講じたが、緊急工事が必要な現場もあった。埋設企業者との施工の協議、調整など工区だけでは対応が困難な事案は、事務所と連携して作業に当たった。

3. 2 被害現場の復旧対応

建設局は、建設業協会と災害時における応急対策業務に関する協定を締結している。今回、緊急を要する被害現場について、協会に加盟する建設会社（総価契約工事の受注者）に応援要請し、応急復旧の作業に当たった。

また、河川や水路に近接した道路では、地元の八王子市が土砂撤去、護岸の復旧作業に当たったことや、NEXCO 中日本からも道路啓開の作業協力を得ることができ、これらを総動員して応急復旧に当たった。

3. 3 的確な判断と状況に応じた調整

道路復旧を迅速に進めたかったが、ライフラインの被害も危惧された現場があり、その復旧作業と並行した工事調整が必要となり、被害に応じた判断が求められた。また、大型車通行規制で路線バスが運休する事態となり、バス利用者への影響が大きいと判断した。至急、防護柵を一時撤去して普通車程度の幅員を確保し、小型バスに切り替えて運行して貰うようバス事業者に働きかけを行い対応した。また、周辺道路の渋滞を緩和させるため、手作りの迂回看板を設置したほか、国道の道路情報板も活用した幅広い広報を行うなど、状況に応じた調整を的確に行った。

4. 経験を通して学んだこと

今回の経験では、災害発生直後の初動対応から応急復旧の道筋をつけるまでが最も大変であった。現場の最前線に立つ工区はどのように行動するか、工区と事務所が密接に連携して対応することの重要性を思い知らされた。

また、現場確認から応急措置の手順を想定しておくこと、悪天候が予想される際の早めの体制確保、応急措置に必要な資機材を工区へ配備することなど、事前の備えが重要であることを学んだ。この災害を皮切りに南西建では、手薄となる工区への職員派遣体制を確立したことや、台風シーズンなど災害リスクが高まる時期を見越した工事発注、応援要請を起工時の特記仕様書に記載するなどの取り組みを行っている。

災害発生時、自分は何をすべきか、果たすべき役割を日頃から考えておくことが何よりも大切であると感じた。この経験を糧に、災害への対応力をさらに向上できるよう、日頃から創意工夫しながら職務に当たっていききたい。

最後に、今回の災害では多くの方々に支援を頂いた。応急復旧工事、緊急施行工事に携わって頂いた多くの方々に感謝し、報告とする。



写真-1 被害状況(陣馬街道・道路護岸の崩落)